ひろば

Vol.121　2012.03.22. 発行
東京工芸大学同窓会
http://www.t-kougei.gr.jp
発行人：田沼　武能
〒164-8678
東京都中野区本町 2-9-5
TEL & FAX　03-5371-2710（事務局）

2012 卒業制作展にあたり

卒業制作展委員会委員長

田　邊　順　子

今年度の卒業・修了制作展は、学生も教員も特別な感慨を持って迎えることとなりました。

昨年の３月、ごく当たり前に享受していた平穏な日々が、一瞬にして失われてしまうという痛ましい現実を目の当たりにし、大学内では、自分たちは社会の中で何ができるのだろうか、何をすればよいのだろうかと思い悩む多くの学生たちの姿がありました。

そして、それから１年間、皆それぞれにクリエイターとしての自分たちの将来を見据えて取り組んで来た成果が今回の卒業・修了制作展であったと思います。今年度も、これまでと変わりなく自由な精神に富み、オリジナリティ溢れる様々な作品が展示されました。ですが今回は、特に学生たちの思いの中に、未来を作っていくのは自分たちであり、その大きな責任を背負っているのだという自覚があったことに間違いはないと思います。

6,000 人近い来場者の方々にも、作品を楽しんでくださると同時に、きっとそのような彼らの姿勢も感じ取っていただけたのではないでしょうか。

今回の卒業・修了制作展を無事に終えた今、彼らがどのような状況にあっても決して自分を見失わない強さを、大学４年間の制作活動の中で培ってきているのだと私は確信いたしました。

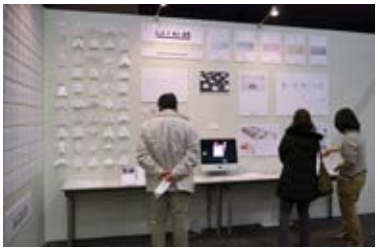
今後もこの卒業・修了制作展が、学生たちにとって大学生活の集大成であるとともに、将来の礎となることを願ってやみません。

写真学科
Department of Photography

映像学科
Department of Imaging Art

デザイン学科VC

Department of Design Visual Communication course



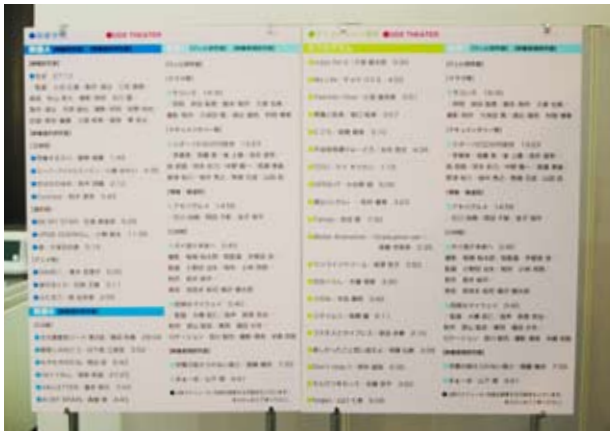
デザイン学科HP

Department of Design Human Product course

メディアアート表現学科

Department of Meia Art

アニメーション学科
Department of Animation　アニメコース



アニメーション学科

Department of Animation　ゲームコース

マンガ学科
Department of Manga

卒業にあたって

■写真学科■
鯨井　智恵

大学に入るまで写真をやったことが無く、またフィルムすら触ったことの無かった自分が、工芸大学の学生になったのは今から４年前。「工芸大学の写真学科生」という現実を入学してからも、中々信じることが出来ずに日々を過ごしていました。入試の際に行われた面接試験を思い出してみても「なぜ自分が合格出来たのだろう？」と思う程のものでした。「絶対に落ちた。」と試験からの帰り道、まだ出ぬ合否を勝手に「不合格」と決めつけて帰宅したのを覚えています。だからこそ、合格通知が届いたときは嬉しくて涙が止まりませんでした。

まるで夢を見ている様な感覚で、４年間はあっという間に過ぎて行き、今から思えば写真を学ぶのに４年と言う年月は少し足りないように思えました。けれど、その４年間の中でたくさんの物事を学び、たくさんの人に出会い、たくさんの経験を私はしました。自分なりに、やりたい事を全力でやって来たつもりなので、「もっとあれをしておけば良かった。」などという後悔はありません。

大学で多くのことを学んだ４年間があり、今やっとスタートラインに立てたところだと思っています。ここまで来られたのは自分だけの力ではなく、先生方や友人、家族の協力や支えがあったからこそ。こうして自由に学べる環境やチャンスを与えてくれた多くの人に、感謝の気持ちでいっぱいです。この感謝の気持ちを言葉ではなく、私の１番好きな「ものづくり」で返して行けるように、これからも初心を忘れず新たなスタートを切りたいと思います。４年間、本当にありがとうございました。

■映像学科◆
瀧本　恭行

「まだ先のことだ」と思っているものは、意外にすぐやってくるものです。

厚木キャンパスで入学式をやったと思ったら、すぐ２年経って中野キャンパスへ。

中野キャンパスに来たと思ったら、すぐ２年経って卒業。

４年間というのは思った以上に早かったです。

さて、「卒業にあたって」ということですが……４年間のことを一度にまとめようとすると、どこから手をつければいいか迷います。

日々の大学生活について書くべきか、力を入れたサークル活動や自主制作について書くべきか、入学当時と今の心境の変化について語るべきか……思いつく内容は色々あります。一つに絞るのは難しいですが、これこそ、私の大学生活が充実していたことの証なのでしょう。

そんな４年間ですが、この充実した日々を送ることができたのは、他でもない友人のおかげだと私は思います。

映像制作にしろ、上映会にしろ、サークル活動にしろ、自分一人では絶対にできない。私と同じことを一緒にやってくれた人々の存在こそが、私の４年間を回し続けてくれたと思います。

彼らに伝えたいことは山ほどありますが、この場では４年間の総括として、感謝の気持ちを述べて終わりたいと思います。

この学生生活は本当に楽しかった。どうもありがとう。

■デザイン学科■
ビジュアルコミュニケーションコース
毛塚　隼人

小さい頃から絵が好きで、この大学にきました。

それから四年経って、知らなかった色々な価値観を見て、聞いて、知って、触って、ずいぶん自分の中のものが変わりました。デザインや芸術って本当に素敵なものです。

大学に入って一年間ぐらい、僕は自分のつくったものの、いいところ、自分らしいところをぜんぜんわかっていませんでした。いろんな先生にいろんなことを教わりました。中でも研究室の先生は、そんな気づけなかった部分を、たくさん発見してくれた恩人です。すごい人です。とても感謝しています。

四年間かけて、今はやっと自分の作家性がみえてきた気がします。

それから、僕は本当におもしろい仲間たちに恵まれていて、いろんなことを教えてもらったり、一緒にものをつくったり、変なことをしたりして、たくさんいい刺激を受けました。

卒業後は、フリーで絵やイラストレーションの仕事をしていきます。新しい生活はとても楽しみですが、卒業までのもうすこしの間だけ、大学で仲間達と制作したいなぁと思っています。

四年間楽しかったです。これからももっと楽しんで生きていきます。たくさん作品つくります。これからもよろしくお願いします。

■デザイン学科■
ヒューマンプロダクトコース
羽鳥　瑛子

できるできないは考えず、興味を持ったら決断して突っ走った、自分にとって贅沢で価 値のある大学生活だったと思います。

デザインの正解や上辺だけを探すことから、正解を作りだすことに意味があると知った ときの自分は、よりデザインの面白みを感じたのを覚えています。

振り返ると、基礎造形から自分で選択して作る段階へ上がったとき、モノを生みだす責任感を恐れ、なかなか作り出せませんでした。影響を与えるもの、役立つもの、愛着をも ってもらえるもの、作るモノに持たせた意味は果たして自分以外の人に伝わるのだろうか。そんなとき、授業や展示会で相手に見せることで、次第に間違っていても評価をもらうこ とのできる環境が、この責任感をもって挑戦する楽しさに変化させてくれました。ときに、他人の作品に劣等感を抱いたり、悔しかったり、いままで知らなかった自分を知ることも ありました。心の中の葛藤は苦しいだけの時もあれば、考える力を増幅させてアイディア を生みだしたりもしました。結果は現実的で厳しいものですが、これからの道筋を教えて くれる大切なアイテムだと気付けたことも、このORENGE の人と環境が導いてくれた学 びのおかげです。

結果的に何が正しかったのか、何が悪かったのか、答えを出すことはできません。しか し、自分が考えて選択した結果は間違いではなかったと思います。こうして４年間、自ら の手で何かを生みだしてきたこと、他人の感性に触れる環境にいれたこと、これから社会 に出る上で人生の糧になると信じています。

大好きな仲間、先生方、大学関係者の方々、そしてずっと支えてくれた家族、全ての方 に感謝しています。これからも常に自分なりの正解を、どんな形であれ作り続けていきた いと思います。

■メディアアート表現学科■
岩瀬　航祐

なんとか無事卒業できたわけですが、この四年間色々とありました。一年生のころは特に何をするってわけでもなく何をしていいかよくわからなかったのでとりあえず課題を消化していき演劇のサークル活動に力をいれてました。二年生になるとプロセシング、アクションスクリプト、maxmsp 電子工作などに興味が沸いてきて物理演算の流れで３DCG にまで手を出してなんだか器用貧乏な感じになっていってしまいました。いわゆる迷走していったわけです。でもメディアアート表現学科は僕にとってはとても良くて色々なことをやっても良いので色々とやっていった結果自分の表現として必要なのは写真でいいんだなと言う事がわかったので三年生からはずっと写真をひたすらパシャパシャとってました。

写真学科があるにもかかわらず別の学科で卒業制作をやれたのはとてもうれしかった事のひとつです。今振り返ってみればいろんなことに手を出してわけがわからなくなってしまってたようにも見えるけどもその様な環境で出来たからこそ写真でやろうと思ったのかもしれないです。

■アニメーション学科■
アニメーションコース
佐藤　哲平

私には中学校の頃からずっと描き続けているキャラクターがいます。小学校のときに友人が描いていた漫画に登場する、うさぎがサングラスをかけているという不思議なキャラクターです。ノートの隅に描く落書きはいつもそれで、作者が驚くほどにノートにびっしりでした。そんなある日、「こいつが動きだしたら面白い」と思ったのがアニメーション制作に興味を持ったきっかけでした。

PC もアニメーションの原理も何も知らぬままこの大学に飛び込み学んでみると、映像を制作する大変さに驚き、とんでもないところに来てしまったと後悔しました。しかし、ノートの隅に描いていたあのキャラクターが自分の手によって動き出したとき、すぐに後悔は消え、喜びに変わりました。そして４年間、私が作るアニメーションにはいつもサングラスをかけたうさぎが登場することになりました。漫画を描いていた友人も喜んでくれました。卒業しても描き続けたいキャラクターです。

卒業にあたって

大学４年間はアニメーション制作以外でも中身の濃い日々でした。KOA やオープンキャンパス、SA、ゼミ活動など思い返せば楽しい思い出ばかりです。もっとアニメーションを作りたい、もっと先生や後輩と楽しくおしゃべりしたい、もっと友人とバカやっていたい、まだまだ工芸大生でいたい。この生活が終わってしまうと思うと本当に寂しいです。

そしてこの４年間は感謝の連続でした。学ぶ環境を作ってくださった職員や生協の方々、つまずいたときいつでも支え導いてくださった先生方、苦楽を共にし、切磋琢磨し、一緒にバカやった友人たち、そして何より、この進路を理解し、震災のなかでも宮城から応援し続け支えてくれた両親、本当に本当にありがとうございました。春からはアニメーション制作会社での新たな生活が始まります。夢は先生として工芸大に帰ってくること！工芸大卒業生としての誇りを持って、前に進んでいきたいと思います。

■アニメーション学科■

ゲームコース

鹿谷　歩似

「ここでゲームを学んでいくんだ」と心を躍らせていたのは４年前のことだ。

人を一喜一憂させ、のめり込ませるようなゲームに魅力を感じていた私は、制作者という立場になれることに早くも感動していた。

入学してからは新しい環境や友人、制作基礎に焦りながら必死に過ごしていたことを覚えている。しかし、不安感だけではなかった。人と接すれば、接した分の考え方・汲み取り方・仕草に出会い、授業を受ければ、受けた分の技術・手法・表現を身につけることができた。新しいことを吸収できると分かってからは、さまざまな触れ合いが楽しいと思うようになった。

それからは美術館や博物館、イベントに参加したり海外に渡ったりと自分の目にたくさんの物を映し出していった。これはどんな意図があったのか、どんな表現方法なのだろう、見た人はどんな想いを持つだろう、どんな、と考えるようになり視野・思考がぐんと広がった。結果、それがゲーム制作に活かすことが出来た。人に遊んでもらうために作るゲームは、主観的な視点だけでは完成し得ない。遊んだ人がこんな操作をするだろう、こんな感情を持つだろう、と客観的な視点を持って制作に取り組んだ。しかし、スムーズな完成は難しかった。ゲームは遊ぶ人との関係だけではない。制作メンバーとの意見の衝突や技量不足の痛感、先生方の鋭い指摘や評価に何度悔しい思いをしただろうか。それを乗り越えるには努力と負けん気が必要だった。それ以上に制作メンバーからのサポートが何ものにも代えがたかった。そしてゲームが完成したときの喜びは一生忘れられない。

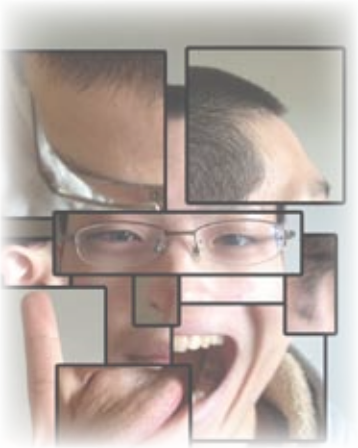
こうやって４年間を振り返るとまさに山あり谷あり。走馬灯のように目まぐるしい日々だったが、決して欠けてはいけないもの。そんな思いにしてくれた周囲の方々には感謝でいっぱいだ。

春からは新しい環境で新しい出会いがある。培ってきたものを糧に、成長した自分に自信を持って歩んでいこうと思う。

■マンガ学科■

髙橋　巧一

やっほー皆。マンガ学科でおそらく一番マンガを描かなかった男、髙橋巧一だよ。
この４年間はどうだった？
小学校６年間より短く、中学や高校の３年間より長い期間。
振り返ってみるとどうだった？
夢が叶った？　そりゃ素晴らしい。
まだ諦めない？　ぜひ頑張ってくれ。
心が折れた？　それもまたよし。
リア充できた？　爆発しろ。
皆それぞれ、十人十色の大学生活があったことだろう。
俺にとっては小学校の６年間より楽で、中学や高校の３年間より楽しい、それはそれはステキで自由な４年間だったよ。
そりゃもちろん、楽しいことばかりってわけでもなかったけどね。



ちなみにこの４年間を、人の一生を24 時間に置き換えたアレに当てはめると大体６～８時。まだ朝飯の時間ってとこだ。そう、この大学４年間は俺達の人生にとって朝飯でしかなかったのだ。しかし、だからといって朝飯を侮るな。朝飯は大事だぞ。一日の出来を左右するくらいにな。皆ちゃんとよく噛んで食べたか？しっかり消化して血肉にしたか？それができたら、皆が皆各々の行きたい方角へ自分のペースで進むがいい。

一日の本番はこれから。先は長い。

つーわけで皆、いってらっしゃい。良い一日を。

■関西支部　双美会
～神戸で例会開催～

23年11月20日、神戸・三宮に集合！

恒例により今回も午前中に２つの施設見学を企画し、はじめに「北野工房のまち」を見学する。この施設は廃校となった小学校の建物を活かして、“神戸ものづくり”店舗の出店や工房での体験教室が設けられており老若男女が楽しめる施設、私たちもひと時、お上さん気分に触れる。

続いて国の重要文化財に指定の「風見鶏の館」を一同で見学する。同館はドイツ人/貿易商ゴットフリード・トーマスが明治末期に建てた自邸で当時のまま保存されており、欧風の生活文化を垣間覗くタイムスリップのひと時だった。

午後の部、懇親会はホテル北野プラザ「六甲荘」にて開催する。

開会にあたって、今年亡くなられた５名の方々（30期/土方英俊、20期・関　秀峰/13期・故田嶋義三夫人照子/23期・木野　渉、同夫人喜久子の各氏）のご冥福をお祈りした。

続いて福岡世話役（30期）より双美会50周年記念誌発刊・配布等の経過報告があり、いよいよ開宴！　上田先輩（23期）の乾杯発声で和やかな懇親の宴席に会場は変わり賑わう。

ここの「六甲荘」には工学部８期卒業の滝本亮太郎氏が勤めており、ご厚意づくしのサービスに預かり、一層の賑わいで盛り上がるなか、例によって各自の近況報告が拍手や笑いを誘う和やかなムードで延々と続く…。恒例の記念写真は山本先輩（24期）にお願いした。開宴からアット云う間の３時間、時を惜しみつつ中締めは三橋氏（工27期）の一本締めで！今日の余韻を次回への楽しみに一同会場をあとにした。

＊屋外及び会場スナップは三橋氏（工27期）にお世話をかけました。

記　福岡　武雄（30期）

風見鶏の館を背に記念写真

北野工房おまちの見学を終えて

経過報告をする福岡武雄世話役

乾杯発声で挨拶する上田史郎先輩

■韓国同窓会支部総会に参加して

韓国の同窓会支部が成立し、その初めての総会が開催されることになった。私(畑)の記憶に残っている海外からの留学生の事を考えると韓国からの数が最も多いだろうと思い、そこで仮にということで、ざっと卒業生名簿から数字を出してみた。平成1年から9年までの卒業生の数は2230名で、その内韓国からの留学生の数はおよそ28名。平成10年から22年までの卒業生の数は大学院も入れると4880名で、その内韓国からの留学生はおよそ65名であった。つまり、平成になってからの韓国からの留学生はおよそ90名強であることになる。昭和の時の卒業生の数を考えると三桁の数になる事は間違いない。日本人の県別の数を調べてみると宮城が119名、福岡が137名であった。こうしてみると韓国からの留学生は日本国内の地方によっては匹敵するほどの人数が来ていることになる。

韓国における同窓生による作品の展覧会の第一回は昨年の12月20日から開催され、これが契機となって同窓会支部が立ち上げられ、第二回目の展覧会の開催にタイミングを合わせて正式な支部総会が開かれることとなった。

展覧会の会場はソウル市を流れる漢江沿いの江西区にある、謙斎鄭鄯(Gyeomjae Jeong Seon)記念館で行われた。この記念館は観念的な南宋画から抜け出し、朝鮮の山河を表現するのに相応しい真景山水画風を完成させた朝鮮後期の代表的な画家である謙斎鄭鄯氏の記念館で、2009年4月に開館された美術館である(http://jeongseon.gangseo.seoul.kr/index.jsp)。この度の韓国支部会による展示はその一階にある企画展示室で行われた。

展示は韓国からKo Jungnam、Kim Sangduk、Kim Sungmin、Park Kyungwook、Park Jengho、Lee Soojin、Lee Enja、Lee Joo、Han Seungtakの9人が、日本からは畑の他に佐藤等、岩崎亮、川島崇志、小浪次郎の5人が参加した。

展示は2011年1月12日から2012年1月末まで行われ、その間の1月12日(木)に支部の総会が催された。当日はまず本展時のオープニングセレモニーが美術館側によって行われ、館長のLee Suk-Woo氏、ファインアート協会のPark DO-Chun氏そして畑が挨拶をした。更に各作品の作者が自身の作品についての説明を行い、会は盛況であった。

同窓会支部総会は当美術館3階の会議室に於いて行われ、68期写真技術科卒 李 泫珍(Lee Hyunjin)支部長の挨拶に始まり、続いて同窓会本部常務理事の糸賀成永氏と畑鉄彦名誉教授が挨拶を行った。平日であったのにも関わらず総会には14名が出席した。会は今後の計画や参加者の状況報告、そして本部から予め送っておいた同窓会誌「ひろば」の配布などが行われ、終始明るい雰囲気だった。

支部総会終了後、近くの料理屋で遅れてきた3名が加わっての宴会となった。皆楽しそうで、支部会としての雰囲気がとても良かった。特に日本における支部総会との比較で感じたのは、若いメンバーが多い点だった。近い隣国とはいえ他国へ渡って勉学をするということには、多くの苦労もあっただろうと思う。それだけに自国でこの様な集まりのできることに大きな意味を感じている様に思った。記念写真を写し宴会は取り敢えず終わり、更にソウル市内で二次会が開かれた。韓国における仕事のことも話題になり、今後この様な話し合いが出来る事が続くと、お互いにプラスとなることも見えてくるのだろうと感じた宴会だった。

韓国における同窓生の集まりは20年前から続いていたが、展覧会は去年から始めた。理由は卒業して国に戻ってきた後輩と先輩の存在を知らせるためと、気易く会えて何か力になれるようになりたいからだ。展示に去年は11人が参

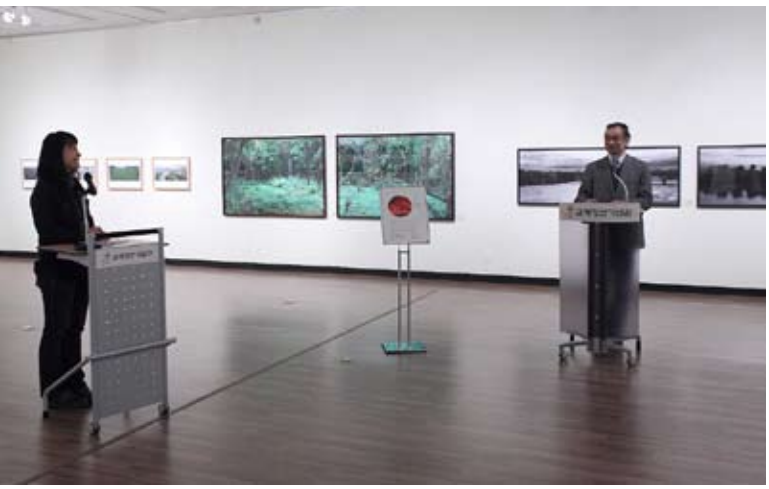
支部総会記念写真

加し、今年は日本からの5 人を含めて14 人が参加した。また、去年からはブログを通じて卒業生と在学生との交流もしている。

短い期間の韓国訪問だったが、博物館や明洞地区を歩いたりし、特に仁寺洞訪問は畑が展覧会を行った所でもあるので、懐かしく充分にその雰囲気を味わうことができた。

今回行われた卒業生による展覧会は毎年行われることが予定されているので、今後日本からも多くの同窓生が参加を希望されることを望みたい。

文責：韓 承卓、畑　鐵彦



展示会場で挨拶をする畑と通訳をしてくれたLee Enja さん

謙斎鄭鄯(Gyeomjae Jeong Seon) 記念館

支部総会で挨拶をする李泫珍支部長

総会の様子

支部総会の糸賀理事と支部長

懇親会光景

懇親会記念写真

ひろばのページ

土門拳写真展「和」
古寺巡礼第五集より
2012年1月16日(金)～3月25日(日)
10:00～19:00
写大ギャラリー
(東京工芸大学・中野キャンパス内)
写大ギャラリーコレクション

「テレビカメラマン　ふり返りの記」
著者：増本安雄

2011年10月16日発行
発行所：(株)牧歌舎　☎072-785-7240
発　売：星雲社　☎03-3947-1021
増本　安雄（34期）

源氏物語と鎌倉
　―「河内本源氏物語」に生きた人々―
著者：織田百合子
発行：2011年12月10日
(株)銀の鈴社　☎0467-61-1930
大熊勢津子〔旧姓渡辺〕（44期）

訃　報　（敬称略）

中　川　英　二	（第16期・写真芸術科）	岡　田　栄　喜	（第34期・写真技術科）
中　島　七　光（茂七）	（第16期・写真芸術科）	宮　沢　一　枝	（第40期・写真工業科）
橋　本　孔　次	（第22期・写真化学工業科）	門田（平塚）千恵子	（第47期・写真応用科）
土　屋　　晋	（第27期・写真技術科）	今　井　　澄	（第51期・写真技術科）
明石（高橋）謙	（第27期・写真技術科）	大根田　秀　成	（第57期・写真技術科）
青　木　利　治	（第28期・写真工業科）	風間（小原）みほこ	（第60期・写真応用科）
雪田（結城）短朗	（第33期・写真技術科）		

編集後記

東日本大震災から1年がたち、大きく変わったこと、変わらなかったこと、色々あるけれど、身近では困ったことが多くなった。

芸術学部では受験生が減る傾向があり、新校舎が続々と出来上がる中野キャンパスも受験生確保には教職員に一層の努力が求められ、一喜一憂。

自分を含め同窓会本部役員にも体調不良の人が多くなり、歳とともに厳しくなる大学との生活に退職の日が待ち遠しい今日この頃である。

広報委員　福村　敏（45期）